

中国

私も大地の子！

茨城県 飯嶋 伊津子

昭和十四（一九三九）年十月、茨城県稲敷郡阿波村（現稲敷市）阿波の飯嶋家の長女として、村内須賀津の母の実家竿代家で、私は生を受けた。両親にとっては初めての子、祖父にとっても初孫だった。大正十四（一九二五）年、梨本宮様が總裁を務める「大日本農会」という団体から、「農業教育」と「農事改良」とに貢献したということと表彰されている祖父は、元号こそ違え、同じ十四年であることに感じ入り、感謝と記念の意味を込

めて、梨本宮妃殿下のお名前を頂戴して、初孫に「イツコ」と名付けることを思いついた。妃殿下は、その父君がイタリアの都ローマに滞在中にお生まれになられたので、「伊都子」と命名されたと伺っている。祖父にとつて、全く同じ名前を付けることは恐れ多いことだったので、ローマならぬ須賀津生まれなのだからと、都を津に替えて、私は「伊津子」と名付けられた。私自身は、宮様とも妃殿下とも関係なく、一般庶民の、それも飛びつきり貧乏教員の娘として、一歩一歩自分の人生を歩いてきた。昭和十七年三月、私に妹ができた。折からの情勢に鑑み、妹は平和の和を採って、「和子」と名付けられた。

どうあがいても貧乏から抜け出せない一家の生活を何とかしたいとの思いから、父は大陸へ渡る決心をした。国策により、多くの人が中国大陸に渡っていたので、その方々の子女を教える教員の募集があった。済南市でも、十六年度から、国民学校が第一、第二、第三と三校に分かれたので、教員を募集していた。祖父方の親類、坂本徳治氏が先に渡っており、学校や宿舍、月給、渡航手続きなどを文面にして、反対する祖父を説得してくれている。中国へ行けば月給も上がるので、父は祖父に送金することを約束した。祖父の許可がようやく下りて、十七年十月二日、「山東省済南市第二日本国民学校」の教員として、父は単身赴任した。三月に妹が生まれたばかりだったので、母の体力の快復と妹が旅に耐えられるようになるまで、家族の出発は見送ることとした。私たち母子三人は祖父に付き添われ、十一月二十五日、渡中のため家を出発した。途中親類に寄ったり欠航があったり、十二月二日済南駅に着いた。私たちを送

り届けると、祖父は四、五日済南見物をして、十七年二月七日、済南駅を後にした。「おじいちゃん！おじいちゃん！」と、私は泣いて別れた祖父を恋しがり、父母を手こずらせたと聞く。それに引き換え妹は、二カ月前に別れた父親に抱かれると、とても御機嫌で満足そうにいつまでも離れようとしなかったそうだ。

十七年、中国に渡ってから終戦まで、日本が戦争に負けるとは考えもつかない両親だったので、私たちは楽しい毎日を送っていた。日本で五十七円だった父の月給は、七十三円となり、五カ月後には三円の昇給、手当も十五円ついていた。日本にいたときより経済的に恵まれた核家族の生活で、のんびりぬるま湯に浸っていた両親は、出発に至るまでの決意はどこへやら、祖父への送金はせすじまいだったが、父は祖父に何度も手紙を出し、渡中を勧めてはいた。祖父は日本の国が大好きだったし、教員退職後、村にある大杉神社の神官として神に仕えていたので、父の誘いには応じな

った。

近所には、稲敷郡出身の坂本先生、橋本先生がおられ、家族ぐるみの交際をしていた。大人は大人、子供は子供同士でよく遊んだ。宿舍は、坂本先生が父の渡中前に手続きして、借りておいて下さった妻帯者用のもので、まずまずの広さだった。

「中華民国山東省済南市興亜北一路新民西二路民団宿舍三十八号」、これがそのときの住所で、一棟四軒の小さなマンション形式の家だった。棟ごとに広い庭があり、その周りをオレンジ色のレンガの塀が囲んでいた。庭には背の高いポプラの木が二、三本植えられており、赤いバラの花が咲く花壇もあった。建物は真中かなり巾の広い階段があり、向かって一階左側が原沢先生のお宅。休日にはスマートな先生と父は、どちらからともなく誘い合って囲碁を楽しんでいた。奥様は薙刀の先生で、よく稽古しておられた。一階右側は私のお友だち、チャーチャンのお家で「チャーチャンチ」と呼んでいたので苗字に自信はないが、多分石井さ

んだっと思う。チャーチャンは、私の一番身近に住むお友達で、一歳位歳下だったろうか、おとなしくてかわいい女の子だった。二階右側が猿田先生のお宅で、男のお子さんが二人おられた。そして二階左側が私たちの住居。回覧板は、原沢先生、チャーチャンチ、猿田先生、我が家の順に回っていたと思う。それを隣棟の遠藤さん宅に届けるのが私の役目だった。遠藤さんは班長さんで、ときどきお宅で常会が持たれた。話し合いが済むと大人たちは遊山講となり、子供は食事の後、みんなでカゴメカゴメなどをして遊んだ。済南市は山東省の省都で、水の都とも呼ばれる湖や泉の多い所で、稲敷郡出身の三家族で「大明湖」に出かけて観光船に乗ったり黄河を眺めたりと、度々家族会を催していた。四十度近くになる夏の暑さ、零下十度前後の冬の寒さはともかくとして、戦時中とは思えない伸びやかな日々を送っていた。

二十年四月から、父は一年生の担任となった。第二小学校の校医、安藤要太郎先生の長男、和也

ちゃんが同級にいたことで、御一家と親しくなつた。安藤先生も囲碁を趣味とする方で、父はよくお邪魔していた。私たち家族も出向くようになり、和也ちゃんもクーニャン（若い女中のこと）に連れられて勉強にきた。私も一緒に一年生の勉強をしたり、歌ったり踊ったりしていた。

日本人家庭の台所から出る野菜くずや、残飯をねだる中国人の貧しい子供たちとの会話、「イツコ、ゴミユー？」「シヨウシヨウ、マンマンデー、ターターユ」は、今まで通りなのに、雰囲気は少し違う。今になって考えると、子供たちの顔はどこか明るかったような気がするが、もうそのころには子供なりに日本の敗戦を読んでいたのだろうか。

二十年六月上旬、在郷軍人の教育召集で、父は済南空港近くの病馬廠兵舎に入隊した。臨月の妻と、幼い二人の娘を残しての応召だった。出発の二、三日前に、「先生にお汁粉を食べさせて下さい」と、安藤先生が汗を拭いながら自転車であら

れた。小豆、砂糖、上新粉をいただいた。母には、脱脂綿や晒、ガーゼなど出産に必要な品々をそろえて、「足りないときは、遠慮なくおっしゃって下さい」と、すぐまた自転車で帰って行かれた。

母の出産に備えて阿媽（中国では既婚の女中をアマさんと呼んでいた）を頼んだ。中国人の女中を束ねる家政婦会のようなものがあり、登録者の中から順番に派遣されて来るので、使用者側で指名することはできなかった。我が家にきてくれた阿媽さんは、大柄でちよつと恐い感じの人だったが、家の中のこと、母の世話、子供の世話と結構忙しかったことと思う。

頻繁に敵機が来るようになり、空襲警報が出るのと、庭に掘った防空壕に四大家族が飛び込む。そんなときに母のお産が始まった。母とお産婆さんだけが家の中に残った。母にとっては、全くの生命がけの出産であった。警報が解かれて私と妹が家に戻ると、母と小さな赤ちゃんが並んで寝ていた。

二十年六月二十一日、弟、浩規の誕生だった。名

前は、入隊前に父が男女一つずつ決めておいたうえで、すぐ付けることができた。そのころ父は、教育召集解除が現地召集に切り替えられて、そのまま軍隊生活をしていた。

八月十五日の終戦。敗戦は、内地の人々にとっても大変だったと思うが、外地での敗戦となると、話はまた別だった。日本人はこの戦争で必ず勝つと信じていたので、中国人に対して威張っていた人も多かったと聞く。その人たちに向けられていた反感が、何倍にもなって日本人全体に跳ね返ってきた。昨日とは打って変わった今日の景色——で、風当たりが強くなり、食べ物や寝具など子供たちまでが、「ニホン、マケタ、マケタ」などと、ニヤニヤしながらやし立てていた。何と言われても、何をされても手も足も出ない立場になっていた。早速に、「子供たちだけで外出させるな」とのお達しが出た。閲覧板を回す私の役目は終わり、母が周りの様子を見ながら届けるようになった。終戦時には私は五歳十カ月だったが、当

時のことは不思議によく覚えている。たった一日を境に百八十度の転換で、強烈な印象を受けたせいなのだろう。

ある雨の晩、チーチャンのお母さんが、「お月見でもしましょうか」と、誘って下さった。チーチャンのお父さんは入院中、私の父は出征中で、二組の母子は、丸い電気スタンドを月に見立ててお茶会をした。チーチャンもその妹さんも、私たち姉妹も久しぶりにはしゃぎまわり、楽しい一夜を過ごすことができた。

敗戦ということで、色々なうわさ話が流れ始めた。「国府軍が集団で家の中に入ってきて、何をされるかわからない」という話も出ていた。そんな話を聞いたすぐ後で、玄関のドアを割れんばかりに叩かれた。母と子供三人が固まってぶるぶると震えていると、お隣の猿田先生の奥さんが声をかけて下さった。「飯嶋さん、開けた方がいいですよ。私も開けて入ってもらったのよ。大丈夫ですよ」と言われたので、母が恐る恐る玄関のドアを

開けると、国府軍の兵隊が五、六人土足のままで家の中に入り、何やらわめきながら物色して帰って行った。あまり被害はなかったが、しばらくは震えが止まらなかった。

終戦のため現地召集組は解散になり、父も九月には帰ってきた。虱をいっばいつけての帰宅で、父は近寄ろうとする私たちを押しつけ、母に風呂を沸かしてもらおうと、玄関前のペランダで衣服を全部脱ぎ捨て、爪先立ちで風呂場まで歩いて行った。着ていた物は全部まとめて庭で燃やした。安藤先生が和也ちゃんを連れて挨拶にきて下さった。先生は、「御苦労様！ 御苦労様！」と、何度もねぎらって下さった。和也ちゃんは、私の父のあぐらの中にチョコンと入って、

「ヒゲハヒゲデモコノヒゲハ、センチデハヤシタトキノヒゲ」

と、鼻の下に少し剃り残したヒゲをもてあそびながら歌っていた。

濟南近郊の鉄道沿線の治安が乱れ始め、周辺の

人々が市内に入ってきた。学校をその人たちの宿舎に当てることになり、授業にも影響が出てきた。十月下旬には学校での授業は無理になり、地域別に生徒の家を借りて寺子屋式授業となった。亀沢先生一家と私たち家族は共に宿舎を出て、安藤医院に移り住んだ。亀沢先生と父は病室を教室にして、近所の子供たちも集めて一緒に教えていた。

放課後は、自由に安藤医院の敷地内で遊んでいた。鬼ごっこ、かくれんぼ、石けり、柿の太木が張り出ている池で、和也ちゃんと釣りをしたこともあった。お姉ちゃんたちのおままごとは、本格的なものだった。長女佳子ちゃん組と、次女緑ちゃん組に分かれ、本物の料理を作って、お互に相手の組をお客様として招いて、全員で料理を味わうのだ。庭に二組の竈かまども作ってあり、献立が決まると台所へ行って材料を集めるのだが、ボーイ（下男）が何でも用意してくれた。煮込みうどんを作ったり、野菜たっぷりのスープを作ったり、佳子ちゃんも緑ちゃんもまだ小学生だというのに、料

理上手だった。私も野菜を洗ったり刻んだりして、それなりに仲間としての役割を果たした。庭にごさを敷いて食べるご馳走の味はまた格別で、このおままごとの経験は、引き揚げてきてからの私の誇りだった。安藤医院での生活は、優しいご一家の皆さんに囲まれて、子供時代の最高の思い出である。安藤先生やおばちゃん的笑顔は、今でも脳裡に焼き付いている。

満州地区に住んでいた人々が、個人個人で引き揚げてきたのに対し、済南市に住んでいた人たちは、団体としてまとまって引き揚げてきた。軍部、民団、町会の人たちが協力し合って、引揚げという大事業にあたった。済南市とその周辺に住んでいた人々、軍関係者、合わせて約八万人。その八万人を、百世帯、約五百人を一梯団として振り分けた。

後で知ったことだが、済南の秀嶺軍（司令官細川中将）の参謀鈴木一郎氏が「戦争が終わったからには、この地に住む日本人を母国日本に帰すの

が、我々軍人の使命である」と、おっしゃって、本人が受けていた内地転属の発令を断って、引揚げのため尽力下さったとのことである。鈴木氏は済南勤務が長かったので、この任務を果たせるのは自分以外にはいないとの強い信念のもと、軍司令官や参謀長と交渉して、軍の資金や兵隊たちの力、そして知人の中国人の力を最大限に活用して、引揚げという大事業を成し遂げて下さった。そのおかげで、済南在住の人たちの中で残留孤児になった者はいなかったそうだ。二、三あった孤児の話は、他所に住んでいた方が、どこかに出かけた途中で、済南で行方不明になった人だったと聞いている。

いよいよ引揚げが迫ったある日、安藤先生は亀沢先生と父を自分の部屋に呼んで、札束を渡して下さった。それがどれほどの金額であったのかは、私には見当もつかないが、「途中、危い目にあつたとき、お金で助かることもあるやもしれません。どうぞお使い下さい」と、おっしゃって、両家に

分けて下さった。安藤家でも、これから引き揚げる家庭なのだから、お金はいくらあっても十分過ぎるということはないはずで、先生のお心はとも尊く真似のできることはない。安藤先生の予想通り、亀沢先生は中国人たちとのトラブルに巻き込まれた際、いただいたお金の一部を道路にばらまいて、中国人たちが夢中になって拾っているすきに逃げて命拾いなさったそうだ。

橋本先生、亀沢先生御一家と私たち一家は、永前大尉率いる梯団に組み込まれた。出発は二月二十日ごろだったと思う。同じ梯団といっても、約五百人からなる大部隊なので、幾つかの中隊に分かれ、その中隊をまた幾つかの小隊に分けての行動となる。橋本先生、亀沢先生とは別の小隊になったと思う。第一次梯団は一月初めに出発はしたが、この梯団は途中でひどい目に遭われたそうだ。済南へ戻ってきて様子を知らせて下さった人もあって、対策を立て直すことになった。永前梯団が第何次梯団だったのかは覚えていないが、二月十

九日ごろに、済南駅前広場に集合した。私と妹は、母の着物を仕立直して作った膝下まである綿入れの支那服を着て寒さに備えた。駅前に着くと荷物の点検があつた。中国人も日本人を遠巻きにして、相当数集まっていた。持ち主がちよっと荷物置場から離れると、疾風迅雷のごとく現れて奪って逃げる構えだった。とにかく、身に付けているのが一番安心と、だれもが着ぶくれていて、その上にリュックサックを背負つての出発である。私も安藤姉妹からのお下がりの赤い花柄の着物や、その他のお気に入りの衣類、下着を入れたリュックサックを背負つた。母は弟を背負つて、手にはおむつを持った。父は妹の手を引いて、大きなリュックサックを背負っていた。荷物点検後、その荷物を持つて全員が列車に乗り込むまでには、かなりの時間が過ぎていた。有蓋貨車にすし詰めに詰め込まれたが、列車は動かずに、そのまま貨車に乗せられたまま夜を過ごし、翌朝の出発だった。

済南駅を出発した列車は、少し走ると止まって

しまう。列車の運転手や、警備の人に品物を要求されて、ベルト、万年筆、時計など要求された品物をそろえて差し出すまで、列車は動かなかった。それでも品物を差し出して、列車が動いている間はまだよかったが、済南駅から約百十キロメートルの張点という駅で、列車は完全に止まってしまった。その晩はどうとうそのまま貨車の中で一夜を明かした。

中国国内では、国府軍と八路軍が争っており、所々で線路が切断されていたので、鉄道による移動をあきらめて、トラックを借りることになった。四歳以下の子供が二人以上いる家庭は、子供たちとその母親を、病人のいる家庭も付き添う者を付けてということになり、該当する人たちは次々とトラックに乗り込んだ。私の家では、子供三人と母がトラック組の該当者だったのだが、私を残して妹と弟、そして母が発発してしまった。うっかり屋の私が母たちの姿が見えないことに気付いたときには、トラックの影もなかった。張点での別

れは私にとつては知らぬ間のできごとで、呆気なく終わっていた。「みんなは？」と、父に聞くと、「和チャンも浩規も歩けないから、お母さんとトラックで出かけたんだ。伊津子は大きいんだから、お父さんと行くんだよ！」と言われ「私も一緒に来たかったのに！」とは言えず、納得せざるを得なかった。

徒歩組は大八車や牛車をチャーターして、荷台に畳を敷いて周囲をアンペラで囲った。そしてその周りに荷物を並べて、体力のない女、子供をその中に乗せた。男の人や元気な女の人、中学生以上の人は歩くこととなった。アンペラの中では、比較的元気な大人や機敏な子供は、中央の上席を確保していた。一番小さい子が座る席は、いつもアンペラのそばの隅っこで決まっていた。徒歩組の中では、大人と一緒に子供は私一人だった。手を引いてくれるはずの父は、当時三十五歳の働き盛り壮年者で、涉外係や使役係の役が回ってき

て、いつも離れ離れだった。ベルトを列車でとら

れた腰に縄を巻いて駆け回っている父は、私にかまけている暇はなかった。私はアンペラの継ぎ目を抑えたままで、話相手のいない存在だった。少し進むと昔の関所のように現地民に止められてしまう。農具をふりかざし、日本人に殺されたばかりに位牌を持った老百姓や匪賊が、道を塞いで通行税の取り立てをしていた。お金何円、ベルト何本、時計何個、着物、オーバー何枚、履いている靴まで要求される有様で、身に付けていた物も順番に無くなっていく。国府軍であれ八路军軍であれ、軍隊のいる所では、鈴木参謀の息がかかっていたのだろう。警備してもらえるのだが、両軍の権力範囲の狭間に来たときが、彼ら暴民のつけ目で、引揚日本人は、追いはぎの餌食となっていた。引揚者は毎日後から後から来るのだから、相手変われど主変わらずで、腕に何個も時計をはめた男が、目をギラギラと光らせながらなおも要求してくる。彼らは、遠方から老人、女、子供たちまでも、出稼ぎにきているようだった。私たちを乗せ

ている大八車や牛車の車夫や護衛の兵隊たちだった。隙あらばと狙っている状態で、アンペラの中の荷物も少しずつ減っていたし、私のリュックサックの中身もなくなっていた。

昼食の時間となり、アンペラの中では皿に盛った差し入れのお握りが配られたが、すぐに長い手が伸びてあつという間に皿はからっぽとなってしまう。アンペラが一番隅っこから、一番のチビッ子が手を伸ばすころには、皿の上には何も無い。皿の上には何も無いことを確かめると、私は大声で泣きわめいたのだ。「伊津子にもお握りを！」と、だれに教えられたわけでもないのに、私も生きるため食べ物を手に入れる術を心得ていた。荷車の中で大声を出すと匪賊に狙われるので、絶対控えなければならぬことだったのだ。大人たちは慌てて「うるさいわね！ 静かにしなさい！」と、言いながら余分に確保した人が、お握りを半分に分けて、いまいましそうに私にくれる。そしてそのたびに、「全く、こんな小さな子を一人残して、

さっさと自分だけトラックで行ってしまうなんて、この子の親の気が知れないわね。お陰で私たちは大迷惑だわ！」と、話はいつもそこに落ち着く。引揚げという場に臨んだ者はだれもが同じで、自分の身は自分で守らなければならない。他人の面倒を見たり考えたりする余裕などはないはずだ。私の両親にはそれなりの迷惑はあつたらうが、一緒に行動するはめになった人たちしてみれば、「親の見捨てた子を、なんで私たちが……」と思つても、それは当然だった。確かに私は足手まといで目ざわりな存在となつていた。おまけに、私もそうなのだけれど、両親は社交的でなく人付き合いは下手な方だった。今までも安藤家、稲敷出身の二家族、チーチャンチ、そして亀沢先生の家ぐらいで、家族ぐるみのお付き合いをしているお宅は少なかった。父は職場でのやり取りはあつたにせよ、母はほとんど毎日家の中で過こしていた。今生の別れになるやも知れぬ娘にも、言葉一つかけず出かけてしまった母親が、グループの人たち

に「幼い娘をお願いします」と言つて行くはずもなかった。どなたかにお金を預けて、何か買ってやってくれと、頼んで行く心の余裕もない。母は生来苦労知らずの呑気な性格だった。父も、自分は梯団のために働いているという自負があつたので、子供は周りの人たちに面倒見てもらつて当然という思いがあつたのだと思う。特に荷車の中の人たちにお願ひしたり、お礼を言うこともなかった。私にしてみれば、同年代の子はみんな母親とトラックで出かけてしまつてゐる。就学前の私は、子供たちの中にも大人の人の中にも顔見知りはいなかった。私は皆の白い目も気にせず、泣きの一手で手に入れたお握りを、すすりあげながら食べる以外どうしようもなかった。

牛車から降りて、だれもが歩かなければならない場合もあつた。道路の両側に火事場の野次馬のように大勢の現地人たちが見ているので、攫さらわれないよう小さな子供は保護者が手を掴んで、列の内側に入つて歩くのだが、手を引いてくれる大人

のいない私は、長い道中、列からはみ出して外側を歩くこともあった。私は何度か現地人に手を引つ張られ、連れ出されそうになったことがあったが、そんなときには、ものすごい大声を出して「キヤー！」と叫んだ。人攫いが驚いた一瞬に手を緩めるが、その隙に列の内側へ逃げ帰るといふ技も身につけた。

宿営する場所は豚小屋だったり馬小屋だったり、倉庫のような建物だったり元の兵舎だったり、さまざまで、コンクリートの床もあれば土間のときもあった。唐黍か高粱コウリヤンか、何か分からないが、植物の茎を床に散らし、その上に藁を散らし、アンペラを敷く。その上で配られた薄い布団や毛布にくるまって寝るのだが、私は一家を代表して配られた毛布をしつかり持って、父の戻って来るのを待っていた。夜だけは父と一緒にいられるはずなのだが、自己の体力を越える昼間の労働に、くたくたに綿のように疲れ切っていた父は、いつもすぐ眠ってしまう。私はほとんど会話のない日々

の中にいた。夜は土間にバケツを置いて、それがトイレとなる。ある晩、薄暗くてバケツが見つからなかった。眠っている父を起こさずに、私は用を足すつもりで外に出た。そこには二、三人の現地民の男たちが、小屋の中の様子を伺っていた。日本人が寝込んだら、こそ泥に変身するはずの人たちだった。そんなときに一人で外に出ていった私を、格好の獲物とばかり、手を伸ばして捕まえようとした。私は例のとおり「キヤー！」と大声を張りあげた。そのときも幸いに難を逃れることができた。

その日も私は、荷車の上の輪から一人離れて、一番外側でアンペラの継ぎ目を手で掴んでいた。外では現地民たちが大声でわめいている。中の人たちは息をひそめてじっとしていた。何と言っているのか私には分からなかったが、殺気が漂っていた。「アンペラは絶対開けるな」とみんなに強く言われていたのだけれど、ただならぬものを感じた私は、ものすごく怖くてたまらなくなり、「お父

さーん」と大声を出し泣きながらアンペラを開けた。そこには、長い柄の鎌を今まさに振り下ろさんとしている、老百姓の大きな顔があった。その老百姓も、こんな外側に子供が乗っているとは思っても及ばなかったのだろう。私が大声を出してアンペラを開けなかったら、鎌は振り下ろされて私は頭に大傷を負っていただろう。出血多量で命の問題にもなっていたはずだ。身に迫る危険を感じ、とっさにアンペラを開けたことでタイミングを外された相手は、鎌を振り上げたまま呆気にとられ、キョトンとしていた。このときは、中の大人たちもびつくりして、アンペラを開けた私を責める人は一人もいなかった。

一日の行程が終わり、その日の宿舎に着くと、どこからともなく物売りが現れてきて、饅頭、包子、飴といった食べ物や、日本人から盗んだり取り上げたりした衣類などを、高い値段で売り歩いていた。大人たちは手早く何やかやと買い求め、自分の子供とおいしそうに食べ始めていた。「地

獄の沙汰も金次第」の世界で、お腹をすかした私の目の前に食べ物があっても、お金を持っている両親は私の近くにいない。差し入れのお握りなら泣きの一手も通じたが、個人が自分のお金で手に入れたものに、泣きおとしの手が通じないことは私も知っていた。私にとってはこの時間が一番つらかった。空腹をかかえながら、しゃがみ込んで皆が食べ終わるのを待つより他になかった。父が私の所へ来るころには、物売りの姿はもうどこにもなかった。

歩いたり牛車に乗ったり、線路があれば汽車に乗って、約二十日かかって青島に着いた。済南・青島間は、終戦前には汽車で十時間とはかからない距離だったという。済南・青島間約三百九十三キロメートル中、それでも約二百六十一キロメートルは、列車で移動した。残りの約百三十二キロメートルを、歩いたり牛車に乗ったりした計算であった。私は約二百八十三キロメートルを、家族と離れて他人の中に入って、ほとんど一人で移動

したことになる。大人たちが話しているときは、全神経を耳に集中させて情報を掴み、後れをとるまい、置いて行かれまいと必死だった。先を行く人たちが、雨や黄塵や、その他の理由で進まなければ、後に続く一団が進んでも宿がない。そのことが一番重要なことであって、その点は、役員や日本兵の方々が連絡を取り合っていたので、どんなに狭くても、隙間風が吹き込む所でも、たどり着いた者たちを何とか収容できる範囲の場所は確保されていた。私はこの二十日間一度も入浴せず、下着さえ取り替えていなかった。一カ所に何連泊かするときでも、母親がいないので洗濯もできず、リュックサックの中の下着も、リュックサックごとなくなってしまうていたのだった。オーバーまがいの綿入れの支那服を着たままで寝て、そしてそのまま起きての行動だった。井戸で順番に顔を洗うときでも、皆に置いて行かれはしなないかと思うと心配で心配で順番がきても洗いに行けなかった。櫛もなく髪を梳ることもなかった。一団の中

でこんな不潔な子供は、私以外にはいなかったと思う。私はただただ、周りの人々に遅れないように流れに乗って行動し、やっと青島まで無事にたどり着いた。

青島まで来れば、港から船に乗るだけだ。略奪や人攫いの恐怖もない。先に到着した人々が出航するのを見送って、順番を待っていればよいのだ。汽車を降り、駅前の広場に集まって注意など聞いているとき、だれかの声が耳に突き刺さった。「ヒロキチャンが死んだ！」それまで、身内の死に直面したことのない私には、それがどういうことなのかわからなかった。母親の待つ宿舎に向かって列が動き出したとき、役目の終わった父が私の側に来て、初めて並んで歩いた。「浩規、死んだの？」と歩きながら恐る恐る聞いてみた。父はたどろろと歩いていた。たどり着いた青島の宿は、学校のようには細長い建物だった。天井は低かったけど、畳が敷いてあり電灯もあった。母は見覚えのあるねんねこ半天を着て、私たちを出迎えた。弟は部屋

の隅に寝かされていた。しばらくぶりの対面で、私は初めて死というものを実感した。弟はただじつと横たわっているだけだった。妹が冷たくなつた弟の顔をなでながら、弟の鼻や耳に詰めた脱脂綿を出したり入れたりしていた。私は母の懐に飛び込むこともなく、ただ弟のことを気が抜けたようにぼーっとして見ていた。

弟の髪の毛、手足の爪、へその緒を紙に包んで、母は帯の間に収めていた。「浩規の形見、生まれてきた証、日本に帰ったら家の墓に埋める遺体そのものとなるはずの品々だった。弟は三月五日、青島に着いて間もなく、風邪から肺炎にかかり亡くなったそうだ。「山東省青島市徳平路七号」これが終焉の地。私たちの中国での最後の宿泊場所でもあった。母が弟をおぶって、ねんねこ半天を着て歩いていたら首がかくん、かくんとして垂れて、背中の子が死んでいるということが一目でわかったそうだ。身内が到着するのを待っていた幾組かの物故者の家族は、決められた場所に急いで埋葬

しなければならなかった。私が浩規との別れを惜しむ間もなく、両親は私と妹を残して出かけた。

青島の三月はまだ寒く、凍土を掘ろうにもたいした道具はなく、申しわけ程度の穴に埋めてきたとのことだった。飢えた現地民たちは、埋められた死人をも狙っていて、着ている物を剥いで持って行った。その後を元のように土を掛けてくれればまだしも、そんな手間をかけるはずはなく、裸の死人は寒空に、野良犬たちの餌食となるだけだった。聞くに堪えない惨い状況なのだ。埋めたという満足感を味わうだけで、後を振り向けない切なさがあった。弟の埋葬が済むと、両親は食べ物を買ってきてくれた。青島には食べ物の店が、出店も合わせて結構並んでいた。一人千円の小切手以外のお金は日本に持ち帰れないことでもあり、どこの家庭でも何かしらの食べ物を買って食べていた。果物と、もう一品食べたような気がする。青島でも差し入れのお握りが出て、お腹も満たされ、久しぶりに手足を伸ばして畳の上で眠ること

ができた。

何日ぐらい青島にいたのだろうか。一週間とまではいかなかったと思うが、突然に乗船の話になって、荷物の整理もそこに港に向かった。荷物といつても我が家の場合、これといったものはなく、着たきり雀の一家だった。乗船間際に、安藤先生と和也ちゃんが見送りにきて下さった。「お元気で、お気をつけて」ぐらいの挨拶で別れてきてしまった。極限のときにあつては、そんなものなのだろうか。私が大人だったら、落ち着く先はわからなくても、実家の住所とか連絡先を聞いておけたらうにと、後で残念でならなかった。もっとも書き取るべきペンも紙もなかったかもしれないが。

アメリカの厚意で、戦車上陸用の舟艇、LSTで佐世保まで送られることになった。黒い大きな船で千二百人も人が乗り込んだ。鉄板のままの船底が我々の休息場所だった。やはりアンペラを敷き、薄い布団と毛布にくるまって時を過ごした。

家族の中では私が一番元気だったのか、船底生活に息が詰まったせいなのか、私はよく甲板に昇って海を眺めていた。乗船に際して多少の食べ物を持ち込むことはできたはずなのに、長男を亡くして気落ちしている両親は、船に乗りさえすれば日本に帰れると、そればかり思っていたのか、家族の着替えや食糧の買い出しを怠っていた。安藤先生のお心のこもったお金があるはずなのに、それを品物に代える力も残っていなかったのだろうか。他の人たちがリュックサックから出して、少しずつ食べているのに、私たち一家は船から出される食事のみという貧しさである。食事はぼそぼそとしていて、まるで木屑のようなフスマを焼いたものだった。今までのどんな食事より不味くて食べられないでいると、父が「食べなければ死ぬ！」と言った。あきらめて少しずつ時間をかけて食べた。

船には四昼夜ぐらい乗っていただろうか。途中、とても悲しいことが起こった。チーチャンが死ぬ

でしまったのだ。チーチャンチでは、引揚げ前に病身だったお父さんが亡くなり、途中では妹さんが亡くなっていた。そして今、船上でチーチャンが死んでしまった。一家四人で大陸を後にするとき、日本を目前にして、お母さんが一人になってしまった。泣いて泣いて、だれもかける言葉がなかった。甲板にベッドが置かれ、白い布に包まれたチーチャンが寝かされていた。おいしそうな果物やお菓子、きれいな花がたくさん飾ってあった。私は、どこにこんなおいしそうな物やきれいな花があったのだろうと、そんなことだけを不思議な気がして眺めていた。それにしても、チーチャンにお飾りするものがこんなにたくさんあって本当に良かったと、私は思った。最後のお別れがすむと、重石をつけた南京袋に遺体が入られた。お母さんが投げさせまいとして、泣きながら懸命に縫りついていたけれど、何人かの男の人たちの手で、チーチャンは海に投げ込まれた。白い飛沫が立った周りを、汽笛を鳴らして船は三度廻った。

チーチャンのお母さんも私も、何度も何度も呼んでいた。「チーチャン、チーチャーン」日本を目前にして、私の大好きなチーチャンは、海の藻屑と消えてしまった。

「日本だ！ 日本だ！」という声に、どかどか、どかどかとたくさんの人が甲板に昇って行った。もちろん私もその中の一人だった。松の木が形よく並んで、とてもきれいな景色。まるで箱庭のような緑色の島があった。それからまもなく佐世保の南風岬に着いた。検疫のためすぐ上陸することはできなかったが、翌日あたりには許可が下り、荷物の検査と頭のとっぺんから身体中まっ白になるほどDDTのお見舞いを受けて下船し、やっと内地の土を踏むことができた。引揚援護所へ行き、収容所で一泊した。そこにはお風呂もあって、身体中ごしごとすって洗ったが、いくらすすっても、後から後からぼろぼろと垢が出てきてきりがなかった。身も心も文字通り洗われた思いだった。父が小切手を現金に替えた。大人も子供も

一人千円ずつで、亡くなった浩規の分も含めて、五千円だった。

いよいよ茨城へ向けて出発。東京で少し休んで、上野から乗った常磐線を土浦で降りて、土浦から江戸崎まで木炭バスに揺られ、江戸崎からは約八キロメートルの道を歩いて、ようやくたどり着いた日本の我が家。祖父の待つ阿波の家に帰り着いたのは、三月二十三日だった。火鉢に手をかざして待っていた祖父に、「ただ今帰りました。長男を亡くしてしまい、申しわけありません！」と、父母は真っ先に祖父に謝っていた。「この家から出かけた者が四人共、無事に帰れたんだから、それが何よりのことだ！」と、口髭をはやした威厳ある祖父は静かに言った。私は祖父の言葉に優しきを感じていた。「浩規！ 浩規も一緒ならよかつたね」とそつと呼んでみても、浩規はもう何も答えず、母の帯の間に小さくなって収まってしまっていた。

引揚げの苦勞と長男との悲しい別れに、精も根

も尽きた母は、帰郷と同時に床についてしまった。お腹が異常に膨れていて「腹膜炎」と診断された。

祖父を一人残して周囲の反対を押し切る形で渡った中国。約束した送金も一度もせず、着の身着のまま乞食の風体で、しかも長男を亡くしての帰宅。その上に妻が病床の身とあつては、それ見たことかと祖父からも身内の者からも、さらには世間からも、父母は痛いほどの視線を感じていただろう。それに、祖父の暮らしぶりは質素そのもので、爪に火を灯すような生活だった。米も配給だけで、やみ米は買わないというより買えなかったのだと思う。備蓄されている食べ物ほとんどなく、唯一あつたのが梅干。今年産の梅が食べられるようになる八月ごろまで、大事に少しずつ食べる心算でいた梅干を、アツという間に食べてしまつて、私たちは祖父を嘆かせた。

四月八日、戦後初の入学生として、私は国民学校一年生となった。通学服は、引揚時に下に着てきたブラウスとズボン、近所の六年生からいた

いた擦り切れたランドセル、雨が降ればずぶ濡れになる裸足の一年生だったけれど、貧しいのは我が家ばかりではなかった。父には母と妹の世話があったので、祖父に手を引かれて入学式に出席した。両親も私も、生活は貧しくとも勉強の面では困らないと、たかをくくっていた。それまでに、私は一歳年上の和也ちゃんと一年生の勉強をしていたので、平仮名も片仮名も読み書きができたし、算数の計算も案外早くできたはず。唱歌もよく二人で歌っていたし……。と安心しきっていたが、学校へ行ってみると自分の名前すら読めず、名前のついた下駄箱の自分の席もわからないで、靴を入れられない始末だった。一カ月か二カ月の間に、私は何もかもすっかり忘れてしまっていたのだった。自分でも信じられないことだった。今、病名をつければ、「学問記憶喪失症」とでも言おうか。私も痛手は受けていたのだ。

父はお医者様から、「栄養のある物をたくさん食べさせて下さい」と言われていたが、母に用意

する食べ物といえは、六歳の娘の摘んできた野草や、小川で捕まえて来た雑魚やしじみぐらいで、育て始めた鶏を眺めて卵を産む日を待つより他なかった。「どうして治ったかわかりません」と、お医者様の首を捻らせた母は、「この子たちを、親のない子にしたくない一心で治りました」と、すまして言っていた。

昭和二十一年九月、父の復職。何年かして祖父は、大杉神社の神官から宮司となった。裕福とは言えないが、ほんの少しづつ生活は安定してきた。高校卒業後、三年ほどで結婚した私は、三人の子持ちとなつてはじめて、一つのわだかまりを解くことができた。引揚時には、否も応もなく自分の立場を受け入れて、ひたすら前に進んで青島までたどり着いたのだけれど、年を重ねるにつれて、心のどこかに両親に対して、「あのとき、私を捨てたのでは……」「私が攫われることを望んでいたのでは……」「私が死んで浩規が助かることを望んでいたのでは……」と、拭いきれない思いが膨

らんできていた。が、自分が三人の子供の母親になつてみると、私にとって三人の子供は、どの子も等しくかわいかった。親の立場で引揚げに臨んだとして、どの一人をも手離すことはできないと気付いたとき、両親もまた私を見捨てたのではない、止むに止まれずのことだつたらうと思えるようになった。帰郷と同時に病床の身となつた母を思えば、両親の選択は的確だつたはずだ。もし私も一緒だつたら、母は日本へ帰り着けなかつたかもしれない。母が途中で倒れたら、三人の子は浩規だけに止まらず、三人共大陸で果てていたに相違ない。私は、自分の三人の子供たちのお蔭で、長年のつらくて悲しい思いから、解放された。「暈の上で笑つて死ぬ」と言っていた祖父は、言葉通り昭和四十八年、八十四歳で天寿を全うして他界した。その二十年後の平成四（一九九二）年六月には、父が「この家のものは、箸の一本、かまどの灰に至るまで、全部伊津子夫婦のものだ！」と言ひおいて亡くなった。そして母は、弟浩規の五

十回目の命日、平成七年三月五日に、八十六歳で旅立った。母の戦後は、自分の死により、長男浩規の所へ行くことでようやく終わった。私の初孫、裕史は六十二年三月五日に誕生している。私は母の命日、そして孫の誕生日を、浩規からのメッセージと受け止めずにはいられない。忘れてはならない三月五日、忘れられない弟、浩規なのだ。

御縁がつながっていたようで、戦後大阪に落ち着いた安藤先生御一家とも昭和二十八年に連絡がとれ、先生と父の文通が続いた。おばちゃんは、帰国後、間もなくお亡くなりになられたそうで、日本の土を踏んでからだだったことだけが、せめてもの慰めだった。父は研修旅行の際、大阪のお宅へお邪魔し、私は関西修学旅行中、和也ちゃんにお会いした。その後、和也ちゃんは大学生の姿を父に見せにきてくれた。また、私が長良川の鶴飼見物をした折に、家族を伴って宿までおいで下さり、清楚でお美しい奥様と、かわいい息子さんにお会いすることができた。お母様亡き後の寂しさ

から、幸せな家庭の主になった和也ちゃんを見て、私はしみじみ嬉しかった。双方の両親が亡くなった現在、佳子ちゃん、緑ちゃん御姉妹と、私たち姉妹の四人でときどきお会いしたり、旅行に出かけたりしている。済南へも四人で行ってきた。懐かしさに泣きながら、「浩規、チーチャン、お姉ちゃんがきたよ。二人の分まで、一生懸命生きてるよー」と呼びかけた。大明湖、黄河新橋、第二小学校跡、千佛山、宿舍前のポプラ並木、行きつ戻りつ何度も歩いた。済南駅の前も通ってみた。「親の結んでくれた絆を、私たちが受け継いでいるのね。こんな風にお付き合いしていること、親が知ったら驚くでしょうね」などと四人で話している。私は数少ない海外旅行にいつも中国を選び、そのほとんどを安藤姉妹とたどっている。「青島と、もう一度済南！」というのが今の私の夢なのだ。

戦後五十九年、いつの間にか私も六十五歳を迎えようとしている。自分の人生を振り返るとき、

五十九年の歳月を経て尚、あの引揚げが私の人生の相当部分を占めていることに気付き、はっとすることがある。ほんの三年四カ月済南市に住み、そして引き揚げてきたことが、私の人生の原点だったように思う。そして引揚げの記憶は、今の私にとって決して嫌なものではなく、むしろ夢のような懐かしい思い出となっている。弟、浩規は、大陸に生まれ大陸に散った大地の子、そして、六歳四カ月だった私も、まさしくあの広大な大地に足跡を残して帰ってきた、大地の子の一人なのだ。